

<同文書院記念センターの発足>

東亜同文書院大学記念センター開設前後の頃 —滬友同窓の願い愛大で具現化—

元東亜同文書院大学記念センター委員 山下 輝夫

私は毎朝、中部経済新聞連載の『愛知大学物語』を楽しく読んでいます。『愛知大学五十年史』は正史としての風格はありますが資料的価値にウエイトがあり、なじみ易さの点ではやはりイマイチです(私は一時期、愛大史編集委員でした)。それに比べ『愛知大学物語』は親しみやすく、創設されて未だ間もない頃愛大に学び長年愛大に勤務した私も “なるほど!” と再認識させられる等、読み物として貴重な連載です。未購読の友人にも勧め、愛蔵版に毎日スクラップ貼り付け楽しんでいます。当初からスクラップ記事読者(?) の家人は「次回が待ちどろしい」ほど愛読者です。たまに友人たちと会うと、話題は先ず『愛知大学物語』で盛り上がります。

『愛知大学物語』に描かれた 記念センター設置の記述

ところで、第107編から始まった「東亜同文書院大学記念センター設置」読んで、執筆者・和木康光さんの記述に若干の疑問を覚えました。和木さんのお書きになっている東亜同文書院大学記念センター設置の経緯そのものの記述は簡潔で、「東亜同文書院大学記念センター展示室」の主要展示物、言わば「東亜同文書院外史の貴重な資料」(書院33期藤岡瑛氏の指摘、『記念センター報・創刊号』48頁)、「孫文と山田良政・純三郎関係資料」にスポットを当てて、東亜同文書院大学記念センター設立の意義を豊かに描いています。このくだりは “物語” らしいドラマ性があり面白く読みました。

しかし、このドラマにウエイトが掛かり過ぎているが故に、筆者の意図とは別に『愛知大学物語』の読者は東亜同文書院大学記念センターの設置を感覚的に、東亜同文書院の中国大旅行の研究に取り組んだ愛大藤田佳久教授と、書院46期生で事務局の大野一石氏お二人の個人的な意図で作られたものと誤解されるのではと思います。実際は後に述べる様に、記念センターは滬友会の呼掛けにこたえ愛知大学の組織的な取り組みで誕生したのです。この夏、北京である滬友同窓(東亜同文書院大学同窓)とお会いした時、先輩もこの見方に賛同しておられました。

「東亜同文書院大学記念センター」が開設されて20年近くの歳月が経ち、当時の記憶がおぼろげになっているのではと危惧し、開設に携わった一人として、あえて東亜同文書院大学記念センター開設の前後の時期を描く事にします。

主として東亜同文書院大学記念センター開設のとりくみの基本的な事柄と報道などの「第三者評価」です。

“幻の名門校” 半世紀の沈黙

敗戦のときからしばらくの間、東亜同文書院大学は中国現地に存在したが故にハルビン学院、満州建国大学などと同じく、侵略戦争に加担したスパイ学校、植民地主義の大学とあらぬ濡れ衣を着せられました。愛知大学設立のときGHQ・C I Eの不当な疑惑から逃れる為に、設置責任者の本間喜一前東亜同文書院大学長は「東亜同文書院大学と新

設の愛知大学は無関係である」と公言せざるを得ないほどでした。

東亜同文書院大学の学生は、日中戦争期は現地駐在軍部の強制で、学業を放棄させられ通訳従軍、学徒出陣と苦渋の選択を迫られ、敗戦後廃校による引き揚げの後も、引き続き長い間東亜同文書院大学のことは、口を閉ざして語る事が出来なかったのです。

私は愛知大学の歴史のなかで、東亜同文書院大学記念センター設置の経緯そのものに、いま一度振り返りその歴史的な意義を捉える必要があると思います。それは東亜同文書院大学が敗戦によって消滅して半世紀、後継校・愛知大学が誕生しての半世紀でもある、その時に歴史は動きました。

東亜同文書院大学記念センターの設立発起人であり、記念センター運営委員長として中心的役割を担われた今泉潤太郎教授は述べています「幻の名門校・東亜同文書院大学とは如何なる存在であったか、自身が東亜同文書院大学を構成する教職員、学生であった本学創立者たちは、これを語るのに饒舌ではなく、寡黙は時に禁欲的ですらあった。時は移り人も変わり、いまは愛知大学通信等にのった関係者の回想などから断片的にこれを知るのみである。創立五十周年を目前に、二十一世紀への鴻図を展げんとする本学にとり、共有すべき精神と歴史の確認は必須の作業である。」(『記念センター報・創刊号』1994. 3)

同文書院大学同窓会の呼びかけ

その始動は1991年の「東亜同文書院記念基金」受託、「孫文・山田兄弟辛亥革命資料」の受贈をうけた時期から、東亜同文書院大学記念センター設置の動きが始まります。

「同文書院の出身者にとっては、愛知大学は言わば母校的な存在であり、書院生の同窓会である社団法人滬友会とは親密な関係

にある」(社団法人滬友会『東亜同文書院大学史』1982年刊、172頁)。

滬友会(東亜同文書院大学同窓会)の春名和雄会長(当時、以下同じ)、同代表幹事の賀来揚子郎氏、霞山会常任理事・東亜同文書院基金会理事の小崎昌業氏、滬友会理事・基金会理事の鈴木信氏の滬友会4人の幹部は、本間喜一名誉学長の最後の教え子である愛知大学石井吉也学長、鈴木沢郎教授の後継者・愛大中日辞典編集所長で教養部の今泉潤太郎教授との話し合いの中で、この時期に愛知大学に東亜同文書院大学を記念する組織を置くことは意義があると意見の一致を見ました。

仰々しく肩書きで人物を紹介したのは、東亜同文書院大学記念センター設置の動きは、個人的な契機からではなく、東亜同文書院大学同窓会＝滬友会の首脳と愛知大学の代表者の関わりから誕生したことを明確にしたかったからです。

この頃、「孫文と山田良政・純三郎辛亥関係資料」の受贈に貢献された大野一石氏(書院45期)から、「自分は間もなく定年退職で愛大を去る。については事務局側で君に、今度計画される東亜同文書院を記念する組織の立ち上げを頼みたい。学長にその旨をお伝えしたい」と要望されました。当時、私は事務部長・広報課長の任にあり、立場上この記念センター設立準備担当は避けられないものとし、後日石井学長から東亜同文書院大学を記念する組織設置の意義を話され幹事役を指名された時、小岩井ゼミ出身の愛大卒業生として光栄な任務と快諾しました。

記念センター創設は滬友会幹部と 愛大第二世代の合作

石井学長はのちに東亜同文書院大学記念センター展示室の開設記念式典で「(記念センター開設)その主旨は東亜同文書院大学

の教育、研究上の業績を我々の手で明らかにし後世に伝える事であります。端的に申しますと、本間喜一先生、小岩井浄先生、鈴木 昶郎先生、同文書院ゆかりの先生方に直接教えを受けた東亜同文書院大学卒業生の皆さんが今ここに沢山お見えになります。しかし、愛大に残っている者と言いますと私たちが最後の者であります。したがって、私たちが去ったあとは、おそらくそういった事は出来ないであろう。我々の手で東亜同文書院の優れた業績を後世に伝えて行く義務が有るということで出発しました。」(『同文書院記念報・第七号』26・27頁)と述べています。

東亜同文書院大学記念センターの開設準備は石井学長の指示を受け 1992 年6月から始めました。今泉教授を設立発起人として、記念センター準備委員の法学部の江口圭一教授、経済学部の高倉民生教授、経営学部の野崎幸雄教授、文学部の田崎哲郎教授、藤田佳久教授、短大部の迫田耕作助教授それに山下輝夫事務部長が、それぞれ任務分担し取り組みを進め、滬友会代表幹事の賀来揚子郎氏、同理事の小崎昌業氏、鈴木信氏は準備活動に積極的に参加されアドバイスを受けました。

一方、今泉潤太郎教授、田崎哲郎教授、藤田佳久教授の指導のもとに、大学院中国研究科の院生の努力によって整理された「孫文・山田兄弟辛亥革命資料展」が1992年9月26日名古屋国際センターで開催、滬友同窓と同遺族の方がたが数多く出席され、学内はもとより関係者の注目を集めました。

愛知大学評議会は学部長会議の提案を受けて「愛知大学東亜同文書院大学記念センター」の開設を決議し、設立の期日を1993年5月30日としました。

47年前(1946年)の5月30日は、東亜同文書院大学の廃校によって上海から引揚げてきた数多くの学生たちの度重なる「新大学設立希望」に応え「新大学を創設するについて最

終的決定を行うため、東京九段下の若宮旅館に旧同文書院大学の教職員12名が参集し、新大学を設置する事を決議」(『愛知大学十年の歩み』1956年刊、11・12頁)した記念すべき日に当たります。

東亜同文書院の歴史を継承する 愛知大学

「愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立趣意書」は表明しています。

「東亜同文書院は1901年、中国・上海に創立され、1945年敗戦による廃校までに約半世紀に近い歴史を持つ。戦前海外に設けられた日本の高等教育機関として最も古い歴史を有する。この経営母体は1898年に設立された東亜同文会であり、当初、近衛篤磨公(当時、貴族院議長)を会長とし、文化教育を通して日本、中国、朝鮮三国と提携しアジアの平和を図ろうとした。その活動は、のちには、東亜同文書院(1939年大学となる)等の経営を中心とする教育研究によって代表される事になった。

敗戦により東亜同文書院大学は廃校となり、東亜同文会も解散した。同校最後の学長であった本間喜一ら東亜同文書院大学の教職員が中心となり同文書院大学をはじめ海外にあった大学から引揚げた学生達のため創設されたのが愛知大学である。

初代学長は林毅陸(東亜同文会理事、枢密院顧問官、前慶応義塾総長)、理事は本間喜一(東亜同文書院大学学長、本学二代、四代学長)、小岩井浄(東亜同文書院大学教授、本学三代学長)らであり、創立時の教職員、学生は大半が東亜同文書院大学関係者で占められていた。

愛知大学設立の基礎となった『霞山文庫』、日中文化交流の架け橋とも言うべき『中日大辞典』、両校関係者の努力の結果現存している『東亜同文書院学籍簿』などは、東亜同文

書院大学と愛知大学との関係を如実に示すものである。

愛知大学は東亜同文書院大学と別の法人ではあるが、同時に『同文書院を背景にもっているからこそこれだけの愛知大学ができた』（創立者本間喜一の談話）のである。その故にこそ『同文書院の出身者にとっては、愛知大学はいわば母校的な存在であり、書院生の同窓会である社団法人滬友会とは密接な関係になる』（『東亜同文書院大学史』より）のであり、また愛知大学にとっても、東亜同文書院大学は生みの親ともいべき存在といえる。

現在、東亜同文会を継承する霞山会とは、理事の相互就任をはじめ密接な関係があり、また1991年東亜同文書院記念基金会から寄託を受け、昨年には孫文・辛亥革命と深い係わりをもつ山田良政・純三郎（ともに同文書院教員）関係資料の受け入れが実現するなど滬友会と親密な関係がある。

愛知大学東亜同文書院大学記念センターの設立は、東亜同文書院大学の教育研究上の業績をあきらかにするとともに、『世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設のため国際的視野と教養を持つ人材』（愛知大学設立趣意書より）の育成をめざす本学の今後の発展に寄与しようとするものである。 1993年5月30日

愛知大学東亜同文書院大学記念センターの開設の反響は大きく、新聞紙面の上でも中日新聞は「愛大の“ルーツ”復活 東亜同文書院センター設立へ」（1993. 4. 15）と報じ、日本経済新聞は「戦前、上海の日本法人大学“東亜同文書院”を研究」（1993. 5. 27）、東海日日「ゆかりの東亜同文書院に“光”あてる」（1993. 5・31）、朝日新聞「幻の名門校、半世紀経て光 東亜同文書院流れくむ愛大に記念センター」（1993. 6. 21）、中日新聞は再び「日中永遠の友好願い…廃校から四八年『東亜同文書院』“後進”の愛大に記念センター」（1993. 8. 2）、名古屋国際センタ

ーの『NIC NEWS』も「日中文化の架け橋に愛知大学東亜同文書院大学記念センター」（1993・11. 10）

いずれも囲み記事扱いで報道されました（『報道にみる愛知大学・ニューススポット』愛知大学広報課）。後ほども述べますが、東亜同文書院大学の認識と評価は大きな広がりとなりました。

書院記念センター “発足記念の集い”

「愛知大学東亜同文書院大学記念センター発足記念・文化講演会」を1993年10月16日に名古屋・伏見の朝日新聞ホールに400名の聴衆を集めて開いた。

尾崎秀樹氏（日本ペンクラブ会長・文芸評論家）は冒頭「戦後、台湾から引き揚げて参りまして、当時の台北帝大に在学中の私は愛知大学に転校するところでした。私は愛知大学に学んで卒業することに成ったかも知れません。しかし理科系だったものですから、法文系中心の愛知大学には入れなくて、そういう意味では大変残念だった思い出がございます。愛知大学の前身である東亜同文書院については、若い頃から憧れを持っておりました。それと言うのも、上海で私の兄（秀美）が一時、上海在住のいろいろな人たちと交流をもち、東亜同文書院の学生諸君とも交渉をもったからであります」と述べられました。

尾崎秀樹氏はこの時の講演趣旨について日本経済新聞（1993. 10. 25）のプロムナード欄で書いておられます「私は10月16日に名古屋で開かれた記念センター発足の交歓会に招かれ、それに先立って開かれた文化講演会で『1930年前後の上海』と題して、講演をおこなった。1930年前後のきびしい時代を背景に、上海においてどのようなかたちで、日本と中国の連帯や交流がはかられたか、尾崎秀美の軌跡を軸に、魯迅、夏衍、王学文、あるいはスメドレーや内山完造、山上正義、

川合貞吉、それに東亜同文書院グループがどうかかわったか、その動きを歴史的に跡づけるものだった。

・『魯迅日記』のその日の記載に「同文書院に行き一時間講演」 魯迅は鈴木枳郎教授の依頼をうけて、書院二階の大講堂東側奥で話しました。魯迅としては、日本人に対して行った最初の講演だった」と魯迅の東亜同文書院での講演にもふれられました。

引き続き、隣の名古屋ヒルトンホテルで開かれた「愛知大学東亜同文書院大学記念センター発足記念交歓会」では、霞山会(旧東亜同文会) 近衛通隆会長、東亜同文書院同窓会＝滬友会 春名和雄会長、東亜同文書院記念基金会 坂口幸雄会長、愛知大学 石井吉也学長、愛知大学同窓会 伊藤鉦一会長と、東亜同文書院ゆかりの五団体組織の代表と関係者が初めて一同に会し、意義有る歴史的な集いとなりました。参加者は記念センターの設立を祝い交流を深めました。

「幻の名門校・東亜同文書院大学」の語り部

東亜同文書院大学記念センターの基本事業である展示室の開設は、展示室となる旧本館の利用までいくつか整理すべき課題があり、また、資料の膨大さから旧本館の補強・改修工事を待って開設する事になります。結果的に記念センター発足年4後の1997年の開設です。

記念センターは最初の事業としてブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』出版しました。滬友同窓が語る東亜同文書院大学の教育の特色と日中戦争末期の大学と学生群像の実態です。また、東亜同文書院大学記念センターの研究紀要と情報誌を兼ねた年刊の『同文書院記念報』(創刊号は『記念センター報』)を創刊(1994年3月)しました。

ブックレットのPRチラシは述べています。

「東亜同文書院は1901年に創立された。日中友好提携の人材養成を目的とし、アジアの国際都市上海に置かれた東亜同文書院(後に大学)は、学問の自由を尊ぶ学風のもと、中国・アジア重視の国際人を養成した。大陸に憧れ中国の人々との友誼を願う学徒たちが、日本全国からこの学園に集い学び、日中関係に貢献する多くの人材が巣立っていった。しかし、日中戦争という苦難の時代に巻き込まれ、敗戦とともに、東亜同文書院は半世紀の歴史に幕を閉じた。「幻の名門校」と言われて久しく、愛知大学の生みの親でもあった東亜同文書院大学、その足跡を学徒出陣世代のOBが語る。」出版の趣旨はここに簡潔に表現しています。

企画・編集は滬友会の賀来揚子郎委員、小崎昌業委員の協力を得て、センター委員であり愛大広報課長でもある山下が担当し、制作・出版は大学生協連との係わりをもつ神戸の六甲出版のお願いしました。ブックレットとしたのは当時、手軽で好評の『岩波ブックレット』がヒントになりました。

『東亜同文書院大学と愛知大学 第1集』は1993年1月に出版しました。編集内容は次の通りです。

- ・「愛知大学との出会い」小林一夫(元NHK解説委員・書院43期 愛大昭和25年卒)
- ・「愛知大学の原点は東亜同文書院大学」小崎昌業(元ルーマニア特命全権大使・書院42期 愛大昭和23年卒)
- ・「私記・東亜同文書院と愛知大学」釜井卓三(元読売新聞社編集委員・書院44期 愛大昭和24年卒)
- ・「「幻」でない東亜同文書院大学」藤田佳久(愛知大学文学部教授)

続いて『第2集』は1994年12月の出版です。

- ・「「馬馬虎虎(マーマーフーフー)」の一語～同文書院終焉前後の思い出～」松山昭治(元中部日本放送論説委員長・書院45期 愛

大昭和25年卒)

・「不幸な時代の青春の記録～東亜同文書院生と反戦運動～」伊藤喜久蔵(中日・東京新聞論説委員・書院40期)

・「祖父、大内暢三の肖像～日中戦争開始時の東亜同文書院院長～」川原寅三(元NHK国際局アジア部長・書院44期 愛大昭和26年卒)

・「十年ひと昔、それでも中国～商社マンの歩んだ五十年～」吉川績(前上海交通大学日本語専攻・書院44期 愛大昭和24年卒)

・「上海から豊橋へ “一世紀” の校暦をたどる」毛井正勝(朝日新聞名古屋本社編集委員)

『第3集』は1995年10月の出版です。

・「書院 上海 日本～わがこころの記～」日野晃(元毎日新聞西部本社編集局長・書院40期)

・「わが故郷東亜同文書院と父鈴木昶郎」鈴木康雄(早大第一文学部非常勤講師・書院46期 愛大昭和26年卒)

・「上海同文書院と愛知大学」林 文月(台湾大学名誉教授・尊父は東亜同文書院卒業生)

・「NHKテレビ番組『上海・幻の名門校～東亜同文書院の軌跡から～』福井哲夫(NHK名古屋 番組制作ディレクター)

『第4集』は愛知大学創立50周年の1996年11月に刊行しました。

・「私と中国～若き日の思い出～」小田啓二(元兼松株式会社代表取締役社長・書院44期 愛大昭和24年卒)

・「幻の学舎 東亜同文書院」中野圭介(日本経済新聞名古屋本社記者)

・「敗戦前後の学長 本間喜一のひとと足跡」毛井正勝(朝日新聞名古屋本社社会部編集委員)

・「東亜同文書院創立者 近衛篤麿のひとと思想」加々美光行(愛知大学法学部教授・現代中国学部長予定者)

後に、この事について私が現代中国学部

の広報を担当していた時、『同文書院記念報・第7号』に「ブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』に携わって」を寄稿しています。

沈黙の半世紀を経て

東亜同文書院の再評価拡がる

『東亜同文書院大学と愛知大学』は本来、大学の広報刊行物ですが、読者層が関係者以外に拡がるよう、前述の六甲出版から出版し書店扱いとしました。

ブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』は版を重ねるごとに好評で、読者はバックナンバーも合わせて購入しているらしく、名古屋の都心の書店では『第1集』『第2集』『第3集』と “ひらづみ” されていました。六甲出版の担当者は「うちの出版物でこれほどの読者からの反響は初めてです」と『読者感想はがき』の束が手渡されました(『同文書院記念報・第7号』参照)。東京・神田の東方書店発行の雑誌『東方』で、1994年4月「いま評判の中国関係書」で『第2集』がベストテン2位にランク、翌年に『第3集』が1位にランクされたとの朗報がありました。また、現代中国学部、法学部、文学部のゼミでサブテキストとして利用されました。この時期、中日、朝日はじめ各紙はブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』の各号ごとに紹介記事を掲載しました。

また、朝日新聞名古屋版は1994年2月に、シリーズ「上海にあった日本の学校・東亜同文書院」を7回の連載で取り上げました。NHK名古屋は1995年4月29日、名古屋・北陸エリアで45分の特別番組「上海・幻の名門校～東亜同文書院の軌跡から～」(前掲)を放送しました。日本経済新聞名古屋版は1995年12月にシリーズ「ザ・中部人国記 第9話 幻の学舎」(前掲)を7話で連載しました。日中友好協会の広報紙『日本と中国』、『月刊アジア』『財界』も東亜同文書院の特集記事を掲

載し、さらには、NHKラジオ日本は「中国の大地を踏んだ日本人学生たち」二日間各1時間で、海外向け放送もおこないました。(『同文書院記念報・第7号』28ページ)

東亜同文書院大学記念センターの発足、そしてブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』の刊行は、戦後半世紀即ち沈黙の半世紀を経て、発信元の中部地方を中心に、幻の名門校・東亜同文書院の歴史的な存在を世間に知らせ再評価を拓けることになりました。そして、愛知大学は「戦後、東亜同文書院大学の教職員、学生によって設立された」とする“真実”がひろく公に拓がりました。

歴史を継承した現代中国学部の開設

東亜同文書院大学記念センターが発足して4年後、愛知大学創立50周年の翌年(1997年)4月に、2年間の設置審査を経て、愛知大学は我が国で初めての現代中国学部を開設しました。

新学部設置の陣頭指揮にあたった石井学長は『愛知大学通信・現代中国学部設置特集号』で現代中国学部設置の趣旨に関わって述べています。

「愛知大学は、第二次世界大戦終結直後の1946年、日本の敗戦に伴う大混乱の中で、中国・上海にあった東亜同文書院大学の教職員と学生が中心となって設立された。『愛知大学創立趣意書』は本学の設立の目的を『世界平和に寄与すべき日本人文の興隆と有為なる人材の養成』にあるとし、その人材は『国際的教養と視野を持つことが最も必要な資格の一つ』とのべている。

・・・愛知大学の“国際”は中国などアジアを意味するものだったし、戦後、ミッション系の大学の“国際”がアメリカを意味するものと、対象をなしていた。今日の国際化時代の中で、愛知大学は欧米だけでなく、中国・アジアに視座をおいたユニークな大学として社

会的評価を得ている。・・・現代中国学部は創立以来の本学における中国研究と教育を基礎に、21世紀にむけて新しい時代に対応する国際的教養と視野をもつ人材の育成を目指すものと自負している。

本学創立者の本間喜一先生は、かつて『アジアを離れて日本は考えられない、愛知大学の建学の理想は中国とアジア諸国のことを理解し考える人間をつくりたい』と語っていた。・・・現代中国学部は日本と中国の善隣友好に貢献する人材育成の教育を目指すのが、それは、中国の人々とその社会・文化を理解し、日本と中国をはじめアジア諸国との平和・友情・発展の担い手となる、人材輩出の場でありたいと願っている」

日中文化交流協会の常任理事でもある尾崎秀樹氏は現代中国学部の新設に期待を述べています。

「もともと愛知大学の設立の趣意として『我が日本の進むべき方向は旧来の軍国主義的、侵略主義的諸傾向を一擲し、社会的存在の全範域に亘って民主主義を実現し文化・道義・平和の新国家として再建する事に依り世界の一員として世界文化と平和の貢献し得る如きものたらんとすること』を掲げ、この日本の新しき出発に際し、学問、思想、文化を旺にし、教養ある有為の人材を養成することを目的に開かれた大学としては、現代中国学部の設立こそ、その中心となるべき学部といえます。

愛知大学の母校的存在であった東亜同文書院大学も『東亜民族の保全と輯協』の理想の下に、その実現に資する有為な人材の養成につとめてきた学校でしたが、その伝統は愛知大学に受け継がれ、50周年を迎えました。現代中国学部の開設はその意義ある法燈を顕在化するものだといえます。

21世紀はアジアの時代だといわれます。その時代に向かって、新しい中国の経済、政治、歴史、文化を総体に把握、理解し、日中関係の展望を確立させるような新しい中国学

の創造をめざし、さらにその中国に対し総合的な理解と判断力を身につけた人材を広く養成しようとする現代中国学部開設は現代の急務でもあります。その伝統ある学風を知るだけに、新学部の開設に大きな期待を寄せることができます。」

愛知大学、滬友同窓の願いを実現

東亜同文書院大学記念センターの発足は、自然の流れとして現代中国学部設置へと連動していきました。愛知大学は創立以来、東亜同文書院大学の歴史と伝統を踏まえ、積み上げてきた中国研究と教育の実践を基に、新たな躍進を求め現代中国学部の新設に踏み出しました。それは、滬友同窓の願いと期待を具現化したといえます。この新設学部はいま述べた様に、普通の新設学部ではありません、いみじくも石井吉也学長、尾崎秀樹先生が述べられている通り、東亜同文書院大学、愛知大学の一世に亘る中国教育と研究の歴史と伝統を基に、それを継承する新学部です。

設置認可時のエピソードをひとつ、滬友会の春名和雄会長は当時丸紅株式会社 取締役会長であり、経団連の副会長でもありました。賀来委員、小崎委員など滬友同窓も参加の席で春名会長は「この間の経団連新春パーティーでメンバーと談笑している時『春名さん、母校に現代中国学部が出来ましたね、おめでとうございます』と言われたよ！いつの間にか僕も愛大卒にされちゃって・・・」と、にこにこ語っておられました。春名会長にとっても現代中国学部設置認可はよほど嬉しい朗報のようでした。

報道は社会的評価の一つの表現です。現代中国学部評価の報道に触れてみます。中日新聞は1995年5月9日一面トップで「愛大に“現代中国学部”」のスクープ記事を掲載しました。1997年4月の現代中国学部開講

以降、地元各紙が開設報道した他、社団法人日中友好協会の『日本と中国』(1996. 4. 15)はタブロイド版一頁で「愛知大に現代中国学部 伝統生かし “架け橋” 育成」と現代中国学部の教育の特色を報じています。中文紙『留学生新聞』(1997. 2. 15)も、同じくタブロイド版1頁で加々美光行現代中国学部長の取材記事で詳報しています。

また、朝日新聞の由本昌敏編集委員は中国・南開大学実施の現代中国学部現地プログラムを現地取材、朝日新聞名古屋版(1997年12月9日～)で7回に亘る連載記事「愛大現中の挑戦」が掲載されました。(愛知大学現代中国学会『中国21・第10号』2001年、253. 254頁)

映像化された滬友同窓と 現代中国学部学生たち

「ドキュメンタリー『青春の中国』甦る東亜同文書院生の夢」日中友好を夢見た学生たちが半世紀の時を越えてつながった…。果たしえなかった青春の思いを、現代の若者たちに託す、東亜同文書院生の夢。時代に翻弄された青春の記録である。」

名古屋テレビは海老名制作担当部長をチーフとするスタッフで、中国現地取材のドキュメンタリー『青春の中国』(2000年放送、東亜同文書院記念賞受賞)を制作しました。この番組でのメインイベントは現代中国学部学生諸君の中国・北京現地実習報告会＝第1回日中学生国際シンポジウムです。そして南開大学の現地プログラムです。この集い・教育実践を激励するため滬友同窓の有志を代表しての参観団が“友情”参加、その光景が映像に映されています。

メンバーは滬友会会長春名和雄氏(書院36期)、代表幹事賀来揚子郎氏(書院40期)、霞山会常任理事小崎昌業氏(書院42期)、鈴木信氏(書院38期)、小泉清一氏(書院35期)、

坂下雅章氏(書院40期)、貝島吉隆氏(書院43期)、釜井卓三氏(書院44期)、元人民日報東京特派員で北京在住の陳弘氏(書院44期)、鈴木康雄氏(書院46期)の方がたです。滬友同窓ではありませんが、新中国成立直後から北京大学の日本語学科客員教員で、当時、北京大学日本文化研究所の顧問をされていた岡崎兼吉先生も参加されました。

ちなみに、これ以降も数名の滬友同窓は、中国各地の現地実習報告会に毎年欠かさず参加されているのです。

映像作品はつづいて、書院卒業後の若いとき、日本陸軍の香港侵攻に反対した抗日中国知識人を、日本軍の占領間じかの時期に香港から脱出する手助けをした書院35期生の小泉清一さん、彼はこのことをこの頃まで語らず、現職を退いたのちは中国残留孤児支援に尽力されてきました。そして中国残留孤児三世の現代中国学部学生に日中友好への情熱を語りかける『時代の忘れ物』(2001年放送、中部放送作家組合賞受賞)。

さらに、かくしゃくたる85歳の書院同窓山根良男(書院38期)さん、社長引退後、単身中国に渡り中国語学習ひとすじ。いま、大連の学生たちとの友誼に充ちた遼寧師範大学の留学生活です。そして現代中国学部6期生のハルピン現地実習報告会・交歓会での年齢を超えた“同学”の感動的な交流を描く『青春の大連』(2004年放送)。

名古屋テレビ“東亜同文書院・三部作”の特別番組です。これらの1時間番組はメーテレ・エリアで、テレビ朝日系列全国ネットでは30分番組で再放送されました。

『青春の大連』の現地取材に協力した大連テレビは、この企画に共感し同じテーマの作品を別に日中合作で制作する事になりました。この大連電機台制作のドキュメンタリー番組『66年后寻梦(66年後に夢を尋ねて)』は、大連テレビ・チャンネルで放送され「反響は非常に大きく、この作品は“中国国家对外宣传評

奖(中国国家对外広報コンクール)” 第3位を受賞しました。」(大連テレビ・プロデューサー徐貴琴さんからの手紙)

「主人は中国が好きでした」

書院評価の映像作品は更に続きます。時期も下り、2006年10月フジテレビ系列で放送され、2006年FNNドキュメンタリー大賞ノミネート作品、テレビ宮崎制作『“新名先生” ふりかえりみて悔いなき時なり』です。

この作品の制作担当・テレビ宮崎の馬原弘樹ディレクターとメーテレの“東亜同文書院・三部作”の海老名敏宏部長の要請で、わたしは前東亜同文書院記念センター委員として東亜同文書院記念センター、滬友会に連絡を取り制作に側面的協力しました。企画書などから特に作品のあらすじを紹介します。

日中戦争期、日本政府は中国人3万8千人を強制連行し全国各地の鉱山や炭鉱で強制労働させました。その内6千人が死亡したと言われています。宮崎県の旧槇峰鉱山でも240人の中国人が強制労働を強いられました。槇峰でも10ヶ月で67人が亡くなっていました。

そこに通訳として21歳の若者が赴任しました。彼の名は新名言志、東亜同文書院大学44期生です。彼は中国人差別と劣悪な待遇に驚き、身をもって中国人の待遇改善を会社側をお願いしました。

映像にひとりの年老いた中国農民の歌う「何日君再来(ホーリーチンツァイリ)」が流れます。新名さんがかつて書院時代に愛唱した歌であり、抗日・反戦の歌でもありました。新名さんはこの歌を槇峰の中国人労働者に教えたのでした。農民は当時のことを語ります「我々を世話した新名さんは優しかった」。

彼の行為の背景には、上海で知り学んだ書院精神が息づいていました。敗戦後、全国の炭鉱などで過酷な労働を強いられた中国人労働者の暴動が相次ぎました。しかし、槇

峰だけは暴動が起こらなかったのです。彼らは新名さんに友情の寄せ書きを残して、中国の故郷に帰っていきました。

映像では東亜同文書院大学の教育を語り、日中戦争期共に学んだ同学たちが新名さんの思い出と書院生活を語っています。そして新名さんの奥さんは11年前に亡くなったご主人について「とにかく中国が好きでした」とおっしゃっています。

この作品に東亜同文書院大学記念賞が贈られました。

語り継がれる東亜同文書院大学

滬友会は愛知大学創立50周年のこの時期に、愛知大学と協力して「東亜同文書院大学記念基金会」と「東亜同文書院大学記念センター」と言う二つの東亜同文書院大学の偉業を語り伝える組織を誕生させました。そして、もう一つ東亜同文書院の建学の理念を継承する「愛知大学現代中国学部」の誕生に立ち会ったのです。現代中国学部の開設は、東亜同文書院大学記念センターの発足と合わせ愛知大学の創立の精神を体する歴史的な取り組みであり、滬友同窓にとって感慨深い慶事であったと思います。

現代中国学部の誕生と同じ年の1997年、ようやく「東亜同文書院大学記念センター展示室」を開設、多数の滬友同窓も参加してオープニングを祝いました。その後、藤田佳久記念センター長のもとで、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業(オープンリサーチセンター)選定となり、東亜同文書院大学記念センターは東亜同文書院の総合的研究組織として活動は大きく発展する事になります。

滬友会のその後について述べて置きます。東亜同文書院大学卒業生(約5千名)は

この頃約1千名となり、滬友会は1996年(平成8年)に会員の高齢化により社団法人の法人格を返上し、任意団体として愛知大学同窓会の友好団体になりました。

2001年(平成13年)5月25日、滬友会、霞山会、愛知大学、愛知大学同窓会の共催で「東亜同文書院 創立百周年記念式典」行事が、愛知大学豊橋キャンパス・豊橋日航ホテルで、翌26日に現代中国学部のある三好キャンパスで、両日で延べ800名の滬友同窓とその遺族、霞山会関係者、愛大同窓が参加し盛大に開催されました。

そして、2007年(平成19年)8月24日、東京・霞山会館で東亜同文書院大学同窓会＝滬友会解散式が行われました。滬友同窓、霞山会関係者、愛知大学武田信照学長ほか愛大関係者・同窓も多数参加し、長年に亘る東亜同文書院大学同窓会＝滬友会の歴史を称え、その解散を惜しみました。受け継がれていくものに期待をこめて。

その1ヶ月後の、2007年9月30日付をもって滬友会の歴史に終止符が打たれ、滬友同窓は愛知大学同窓会の特別会員(任意加入)となりました。